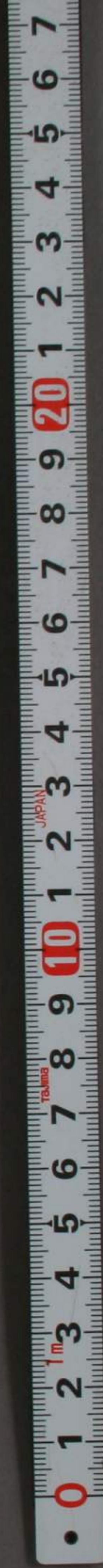




重修真書太閤記
三編
二

~13
459
22



3
459
22

消
福
永

重修真書太閤記三篇卷之四

坂井久藏武勇恩賞事

并塙長八郎武士とあり改名の事

萬斤と擧る力ありと四面の楚歌小驚き千戸侯の
募を聞て故人の交と思ふ項王の勇は張子房乃智に
如と箕作乃城責小柴田佐久間森坂井の等武勇怯
きにありとその勢もや少ありとこれどもそれ
やどの功を見と明智光秀味方敗走の虚は乗ト敵を
計らんとせしめどもその術のやと整るは木下光秀と
にこれと奪はるるやめ木下光秀と對話のあいど

同
會
攻
印

大岡記三編卷之四

とや付入の計策を悟りて我組小れを告て如
斯るも一むるも元より秀吉の得る人を以て人
を攻しゆる方寸とりて一光秀敵を偽引出し態と
敗走をば勝小乃りと定て追来す一その時腹心乃
輩と敵兵より城中へ紛れ入りしめ味方進んず表
手厳く攻ん時紛れ入たる味方の輩小裏切らせあは
しくは役所へ火をさせんと謀りしをも手勢は
るる新小付られしものども心任を小用ひがこ
くその中小小物あるる兵士もさういあれどもあれ
又光秀と親しむるあけは十分小機密をばしりしが
しく只四人の郎等乃りしあれはうめてとをいし一様小を

くゆらずあに木下藤吉郎は平生の心懸あひくして
敵國小打入時ハその將家乃合印袖印をあしりてとき
けりふりり時乃りて變に應じしれを用ふ故小付
入の謀とししれ我兵士もあれをあしりてこれを用ひし
ひりふりり木下の兵士忽ち變じて六角の兵士小混ら
しむべし今日の城責柴田と論ぜし所々の謀略を用
ひんとおをいしゆある然るに光秀の所望に
譲りあしりしかども和田山落城乃ら箕作未だ落去
せざりけしは明智もさうそのありしれを計策
はあどまきに遅滞小あしりて不審ありとおをいし
うば様子と伺ぐり一方便せんとおをいし五百乃兵

と率し明智の陣小来てそのはらうことを問は味方乃
軍勢敗走とることを謀の一助ありと答へ光秀の一言
をききてよきや付入の爲あるべしと推量し心中に光
秀の計策ありらぬども敵小紛るべき用意ありしと
見ゆきはおもふやとてさうゆまどこの謀をゆの
むんば落城隙入て後の妨とあるべしとらば光秀
面目を失ひ柴田佐久間も鼠負せしとの相違を
快くおもはるべしといふおる害心をさしをいせんも
知べしとて又城責をゆるは光秀驕慢乃心を生
しらくの災を引出とべしとの度の功ありて新
衆の身さらまち重く用ひられるは大小殿乃仇と

なうんを必せり志うらうして彼驕慢の心をおさ
へ置乃らくの無事をさかるとし始終のほう
アとて定めさてあそむが手勢小例の深智の奇計
とゆき光秀小借らるるれ蜂須賀稲田加治田堀尾
乃面々光秀小顔と志うらねば雑兵乃ありあそてな
し佐々木家乃士卒光秀が兵と追勝小のうて走り出
時々や木下のものをい城小入とてゆらるるありあれ
袖印笠印とてよく佐々木家の士卒のるきものどもそ
おちしけしと誰うあれを見咎むべき光秀もまた我
陣中よりこれ等の人の抜出とて知らるることあり
雑人原とおもひつとばるる是木下の熟せし奇謀

よて佐々木家の人を欺き、あくる日光秀とて、
たゞ援けありて攻むる時、木下が、いづる勢の中より一
人進み、城中の敵を招き、朝霧の蜂須賀小六正勝、
城中より手と合せ、堀尾茂助、蜂須賀又十郎、稻田大
炊加、治田隼人、青山小助、長沼半之丞等、三十余人あり、その
内より長沼隼人と討つ、堀尾形、明智が兵士も紛れ
入り、といども、四人より、志も、袖印、笠印の證ありけ
れば、城中と心のあつ、小下りて廻ることあるを、いふと、手ま
もあつ、ばと見合せ居り、あり、木下が手の者ども、三十
余人と、元来江濃乃案内者ある上、佐々木の印と付られ

いかに、よまに、いづる廻り、終に謀り、あつ、振
舞ひあり、敵もあつ、この印の混雜せし、いづる同士討の
疑を起させし、と木下り得る妙策なり、さうふり、
城の大將吉田出雲守、まへられ、見つけ得、と兎角ひ、まど
り、うち小も、味方の兵士と、城中へ引入り、あり、こと、さうい
木下の五色の、さう、そのと、堀の上、立上り、當城の一、番
乗木下り、高名と云つ、べ、然れとも、藤吉郎、あれ、と我
功とせ、と城責の大將明智、る、れ、則、明智、功あり、と、称
して、これと、衆小、示し、これと、本陣、披露せし、と、木下
が、大器量、乃、何と、見へ、然れども、軍中、一人、と、いづる、水
下、が、勢の、第一番、又、城中、入り、と、知、さう、その、ほ、あれ

木下我身乃功とくきは却くすもちく顯れつ光秀
が驕慢心をおさへ柴田佐久間が嫉妬とさくる奇策よ
してくぬく胸中小秘とて孫兵の妙算あり信長箕
作落城の言上をきかへぬ木下明智兩人を召出され
同く褒賞ありしつふそ明智いさか面目を施すとて
ども心中小木下が奇計を恐怖いさかを慎
くいさかも驕慢の色をおさへ柴田佐久間を明智
と見負さへども森三左衛門坂井右近算作の攻口小
あつく正しく木下が謀の的中をきくことと知を以て柴
田佐久間と光秀が計略の木下に及るゆきと告げりよ
うり兩人偏執の念自然と薄らぎりあれ等乃始末

とべて藤吉郎が心のちく小あつひきけりすと實小大智
乃妙恵といひつべし去むと小信長箕作和田山兩城落
去をらるるあび諸將の功勞を感賞ありかども坂井
久藏が十四歳の小腕よく建部源八兵衛と戦て源八兵
衛を威怖せし軍功を何の沙汰も及をれど
流布本源八兵衛を撃つその首を取て實檢と備
えりかども源八兵衛に聞えり勇士なり是必父右
近り功ありと我子小ゆづりしものあるんと思召褒賞
乃沙汰及びとさうけつを塙長八證人と形く遂
よその功を録されしとあり然れども建部あつ時
に死をどくく此段を削る

大岡記三編卷之四

爰小信長乃櫛塙長八箕作戰場ありて建部と久
藏り戦ふとて見届つれ久藏が幼稚小して大人
にも耻ざる軍功ありけり殿も疑はれ一言乃褒賞
小及をばらんと無念乃けりておをひり信長
の本陣も参上り前田孫四郎利家小就く言上りけり
あのみび坂井久藏幼稚小して建部源八兵衛と合戦せ
しと不審小おぼし久藏れ由據るき義小ゆ共近
頃残意至極小存小抑久藏御本陣を只一人打出しとい
うももいぶりて存小ゆ急某坂井の跡も付て慕ひ参
りて一処箕作山へてせれけり射小見受ゆは幼稚乃
者の事るが危く存小ゆ急後れを馳上り木蔭小

忍びく久藏が振舞を見居小小城も向ひて戦を挑
さて乃ら建部と合戦小及びしといさか以て相違な
くは相應の御褒美あり度存とてつづき某と坂井
父子は何のゆゑもおぼしめども奇代の名譽るく
埋れゆ若手の氣力を引立せき妨とありゆをん
と殿の御為小最惜く存小且は彼等父子嘸本意あり
おをひゆをんと推量仕ていふも残念よおをひゆ
りもかりとていふ言上小及び小猶箕作より降
参仕小輩ありて彼等小御尋小ゆ分明と相知ゆべ
と取るゆか信長とてかり長八と共し出され直
尋ねるひけり小いさかも疑ふべき小ありぬを箕作

降参の兵士を呼出し始末を尋ねられけりといづれ
も眼前小見つることかまはわりの浦にと言上りける
あまよ於て長八が条とて一も偽りあるくろ長八が
うとせば久藏をしくわやうのり一とて落ちて明
白に聞食分られ然らば久藏をせとて御前より召出さ
れ建部と戦ひし初中終くく尋問らるる久藏
謹々答やける骨法射配りのつらむは詞いさか漢ふ
く述らるる久藏無双の勇士の難んぶる處るる小
久藏幼稚小く臆するも見を心上のやどの
りてらあとおやれ今日働まは塙の長八が
證人として訴ふる處るるさかくんは莫大の勲勞も徒

然よあまぬべきこと口惜きことあらはれを見習へ
や若きものどもとして久藏は新知二千石を宛行せし
る小より天晴希代の勇士やと陣中舉げてあれを譽
たりげり然しては久藏が武功のあらはれ一はま
く長八の意あることこれをも取立侍とて塙の團
右衛門と改めらるる長八面目身小あまも悦ぶと限り
お

塙氏の常陸大掾維幹の後胤常州塙城主塙次郎盛
幹乃孫右馬允頼重康安年中斯波家より從て尾州
春日井郡山田庄大野木村小移り住まはれ尾州塙氏の
祖より團右衛門ハ葉栗郡龍泉寺村より出とて

て但塙へ土堅くして拔べりしと字書不見へとも
垣土の黏着して水の抜ざる義ありしは塙と
もハニと訓しハニと轉せしは字音の如くおも
ゆるれとも然らばハナワと訓じらばハニワの語の
轉せしなり

坂井右近我子の久藏過分の新恩を賜はりし御礼
と御本陣へ上り上り森三左衛門より長八言上
小及び一趣を聞き塙久藏を救ふはあらずい
く乱軍のうらよ戦死せりけり危うき次第
うらよ厚くあれと悦びしに今日より殿の仰あり
塙團右衛門と改めし上り傍輩あり今やその籠と

あるがらびいでて懇志を通し長く好を結ばし
とく我名字の一ツをわし尚之と名のらせしは團右
衛門本貫は尾州羽栗郡植谷龍泉寺村の人幼稚より
武藝をまの山林幽谷を馳廻り鳥獸を逐く筋骨を
固め大江深淵より出沒し氣息を調えいふも侍
とあり手柄を顯しをなすとおもひ十七歳の時織田
家へ奉公し籠を勤めし

籠音龍馬の鞍ありと云ふは籠頭なりと云
籠音籠漢書より籠籠通し用は籠頭籠頭同し
義ありしは廣韻小乘馬也牽也と注しを以て
馬の口牽人を籠としるるれとも本義を籠頭を

取^り牽^ひバあるべし本名^{かんめい}を舍人^{とくわん}あり源平盛衰記よ
マシてめらくの書^{かき}も舍人^{とくわん}とのまじり
一心^{いつしん}のまじり所^{ところ}あるれば奉公^{ほうこう}大事^{だいじ}又勤め預^{あづか}りの御馬^{ごま}
と自身^{みづかみ}湯^ゆあらし手^て入^いせしやとたいつしか等輩^{とうはい}の預^{あづか}
れる馬^{うま}より毛^けより光澤^{くわつさく}よりありけし信長^{のぶなが}大^{おほ}に感^{かん}ト
あひ外^{あひ}への寵^{ちゆう}より禄^{ろく}も一倍^{いちばい}賜^{たま}はるる殊^{こと}恩^{おん}を施^ほし
あへ長八^{ちやうはち}もいやく誠心^{まことこころ}と盡^つし遂^つに戰場^{せんじやう}に供奉^{くわんぷ}し
敵^{てき}を打^{うち}とよごよ五六^{ごろう}度^どふありつるまも名譽^{なご}の働^{はたら}
あるがゆゑに織田^{おだ}殿^{どの}うれが力量^{りきやう}ありつる武勇^{ぶゆう}等輩^{とうはい}
小勝^{せうかつ}れしとぞ知^し食^くしつる侍^{さむらい}ふ取立^{とりだ}えんとおれ
やめしげるに今度^{こんど}の働^{はたら}き時節^{ときせふ}ありつるおれは

引上^{ひきあ}あひしおる長八^{ちやうはち}郎^{らう}本望^{ほんぼう}よそふ成就^{じゆうじゆ}しこれ共^{とも}
年^{とし}をづくに十九^{じゅうく}歳^{さい}奉公^{ほうこう}の勞^{らう}三年^{さんねん}おるつら
忠勤^{ちゆうきん}とまじりし武功^{ぶくわう}も度^どりはありかとも生得^{なまじ}大^{おほ}
酒^{さけ}を好^{この}み酔^よふ乗^{のり}りて膂力^{りきりき}平日^{へいじつ}も十倍^{じゅうばい}も良^よもこれ
は喧嘩^{けんか}口論^{くわんろん}を仕出^{しだ}し人^{ひと}も傷^やけしむに織田^{おだ}殿^{どの}もをて
餘^{あま}しむし一旦^{いつたん}勤當^{きんたう}ありつる浪人^{なみのり}し木下^{きのした}り詫言^{わご}し御免^{ごめん}
と蒙^{まう}りやがく藤吉^{とうきち}郎^{らう}の組下^{ぐみした}とあり所^{ところ}への軍^{いぐさ}も功^{こう}を
立^たつる例^{れい}の我意^{わがい}も募^もり木下^{きのした}の心^{こころ}もさぐし牢人^{らうじん}
し加藤^{かとう}右馬^{うま}助^{すけ}嘉明^{かみ}の手^て小付^{せうづ}く朝鮮^{ちやうせん}へありつる船手^{ふねて}
の軍^{いぐさ}も比類^{ひるい}あり働^{はたら}きしけれは功^{こう}も太閤^{たいがう}乃^の御感^{ごかん}
よあがりつる歸^{かへ}參^まと許^{ゆる}され太閤^{たいがう}薨^{こう}御^ごのら奉行^{はうぎやう}職^{しやく}と

あるれしに大野父子の奢侈せしむく不快も過け
るうら終に讒言あり大坂を退去せしむも豊臣
家無二の志ありけるにうらあさび入城し元和元年夏
陣に泉州堺の津まで花の敷軍して討死せり行年
六十六歳古今たぬしとくちるき勇士あるれども大酒
とこのじ病ありて度く身と誤ち格別の立身もさび
浪の艱苦して終を取まて然い武士の慎じさきと媢
酒の二つとあられさる

信長観音寺城へ使者を送る事

并承禎父子退城の事
去りし信長江州入り初度の合戦小六角家第一

乃要害箕作和田山両城を暫時小攻破る勢ありしも
破竹小似く九月十二日午刻のころめるれば是より
いづれの城も發向とまきやと評定ありけるに諸將等
る観音寺の本城へ取のらせあさびしと中者多うつ
し中小木下藤吉郎ひとり観音寺城を攻めんと
然るべし箕作和田山落城せしといちし六角家乃枝
城もくたし知べしとびやく兩城小火を放らく
焼拂ひあさびをゆりて當國少く兩城を攻落され
しと時の間に見聞してことごとく恐怖乃心を懷
くべし臆病神どにさそひあるは忽ち退去の念を生じ
べしと水勞きびし功を立る術までい今夜一夜兵

氣を養ひむろくまの國の城く大形を明く退をの多
 くゆひるん味方ハ休息して銳氣を助け敵を恐懼し
 て臆病を起しらん又誰かは御旗を向うて楯を
 突ねらるゝ交へんま只今觀音寺へ向をせむはく
 さびが累代の居城あり叶ふぬまでも死を極め心は
 一つあちりく防ぎ戦ふべし然らば味方も多く損む
 べしあれは觀音寺へ程近し承禎父子と始先諸
 士同殿のま切て攻ませむと推量してま
 まうけらん少その義あるは張詰し氣の撓むり
 士卒たぐひ疑を起しるハ妻子の恩愛と思ひわを
 此いふもして身の全らんるるまやあつと心

變の者出來べし諸士の心のまらん承禎父
 子いふも永く籠城するべし又本
 城を攻落しむとも承禎父子を討取むるは後
 安くおやめは六角ハ當國數代の守護職之百
 姓町人中でもその家風を慕ひその恩を蒙らざるまの
 ろは殿の六角父子を討せむしを遺恨まおも
 ひ仇しし秘らひゆり當國を平均ありまのら腹
 心の災をのろひべしあれ然るま謀小ゆを一夜
 の猶豫小君の寛仁ある處を示し諸民の心を取あふ
 べし別の御使を觀音寺へ遣はし是利害を説せ
 ぬ承禎るる降伏仕るべしとせむは織田

どの實をとおぼしめされ即時に軍使をせしめ味方の諸士を休息せしめそのら使節を仕立て観音寺城へ遣はし承禎父子へやされし様新公方義昭君濃州へ御動坐せし御一逆臣三好を御退治あつべき爲信長御先仕りき旨仰出さるるにう濃尾の軍勢を催促し是中を發向ふ及び六角家へ京都將軍家ふ於て一方おぼしめ賞賚するも家筋あるも度この御頼を黙止し逆臣ふ与力合射せしむこと近頃以て氣の毒ふ然共新公方の御旗を望み見ば速に陣頭を參上し前非を悔ひさるべき筈おぼしめその儀おくれの間箕作和田山を攻落してゆ弓箭のしらひ力は

あの上のそれへ押寄せりけれども累代當國乃守護としく久しく武恩を蒙るるがら一旦の意地よひるに不義とは先祖の忠功を思召替られ恩免の御沙汰あつべき様申さるるに間をやく城を開く台駕を迎え奉るべし又猶も前非を悔ひ及ぶに御敵とらあつ果してんらば即日押寄一戦の下に武威を逞しくおとすべきあり但我等の義兵あり義兵は敵とる輩と逆賊與力の不義の兵士あり天道の義を尚ふ誰り不義ふ與ふべき人道の君臣を本と誰り君を弑し一三好は從ふべき數代相續の名家不義ふ與し不忠ふ從ひ亡びうせおんことを歎きても猶おけりしき哉

能く思案して返答不及を乞ふとありける外木下
藤吉郎も別な使を添て年来入魂せしとあれ
ばいりももして佐々木の家の長久形んことを祈る由
をいませり観音寺にて承禎父子をばつての諸侍
大將箕作和田山の一日ありとど落されしと全く織
田家の武勇智計乃勝れしとのろあろ天道の助くる
所人あれ小從の理るるくと漸おそひ付るるける
処へくる使節の来りて利害を説示されしに
難面もをてふりて例もよく使者に應對し
あれり即刻御返事やべしとて使者とて
て後承禎やされける當城を累代乃居所ありとの

処へ敵を引受んと末代までの耻辱なり又降参せんこ
とも今更面ぶせありりさらばあめ城と出く敵よ
一花をくせ鋭氣をうけ又くと思慮もあるげり
評定一決し取るものも取あぐと手廻り乃調度若干面
く手く小づと石部の城へと落ゆきけるはうたてり
まじることどもあれ
観音寺山乃城ハ佐々木判官時信の居城よりくその
子三郎兵衛氏頼入道崇永居士観音寺と草創し其
子満高その子満經いづれも鹿苑院殿乃御一字と
下されくも満經の子久頼その子高頼その子定頼
そめく北陸道の總管領職を賜るる江州伊賀乃

大岡記三編卷之四
十三

守護職小補をりれしは、その勢他日小倍し
 柳營第一の爪牙とて、そのおぼしめされ義證義晴二
 代將軍の御後見し、舊功を忘却し、三好より合
 体形し、承禎入道乃不祥といふ、その年右
 衛門督義弼二十三歳、九代相傳二百五十年に
 及ぶ、観音寺と棄去あり、慨歎小く、石部ハ観音
 寺乃南小あり、武佐鏡と過横田川と、今道
 一日路に近し

重修真書太閣記三篇卷之四終

重修真書太閣記三編卷之五

三雲新左衛門尉観音寺の城を守り事

并秀吉名察三雲を退城せしむる事

佐々木六角弾正少弼義賢入道承禎同右衛門督義弼
 信長を防ぎしめんため要害を構へけり、箕作
 和田山の二ヶ処忽ち落去し、あまは、其の競ふのり
 観音寺山へ大軍よを來るなりんと恐怖れて有る
 処へ信長乃使來て公方家御陣へ参上仕るるを、
 由を勸め、かとの流石面目あり、あひひられハ父祖
 代々居城し三雲新左衛門尉をのり置入道父子

石部の城を志し女性幼稚を先どて取りのも取あは
落て行愛智川の本陣より使者の歸るを待つけ
いづれやいと問ふ承禎父子のりてあはり
先達て行向ひし時とを大よめりいとのとやうよ
使者と何らひ御返事へ此方よりとや出さいと
言上よりか信長聞召さる有べしと仰らるを
藤吉郎側より明日を殿の御座を觀音寺城へ
らり奉るこころにて承禎是より御返辭やべしと
心静し退城仕らんと心よそい彼等心中を推量
は所詮防戦かあひくくもいへとを今更御陣へ
参上仕らんも何とやう耻かやうくあひひ暫く

退散して再應の思慮をめぐらしやさんとの見と
聞えい本城落去いも枝城ハ手間入るる
聞落しれ落いせんぞらん然八十日の内は御上洛
阿るべきこといと言上しけし信長よたも喜ばけよ
見へ後ふ所ふ翌る十三日の曉々斥侯の使番に
歸り觀音寺乃城より夜中小大勢退出しゆり
能く伺ひしハ承禎入道父子をそめ女房幼稚れ
りの資財雜具を持こび我先と落さむいと注進
しむせば信長藤吉郎やを言葉の符合せを
よろらびあひさうらなまづ彼城入り手配り
あさんりのとと思召總軍を引率し觀音寺山の

麓ちりくちり寄て見ふハ塀の上ハ旗とあびるを
 其の陰に軍兵楯籠りて見へく鐘長刀
 旭乃光りてり添り然ども大將はては落り
 由なかりし注進あり上ハ一定敵の謀を味方の
 兵士を疑はせんとの事ありし速に乘入やせ
 下知をあり先陣既に進く近付んとするを木下
 急よあり止め大將も落失らる共去とハ佐木此
 本城あり落止りて敵の様を見んとありふ侍もか
 くれありて小勢に残り止り兵士ありたゆめを
 りれとあがりめする處をよあはる鹿麩忽の振舞を
 あさば大なる過あるべし作法正しく備をせしむ

進くのと異見それとも横紙破りの若者とも何条
 さるその何れもさぞとくやづ鐵炮を打かけ只一
 りふと押付たるは城中鎮まりかつ音もを
 寄手つゞく競ひかりされをよそく空城を
 何と心遣ひをこころとてそやりの面く真先ふ
 進ける時城中はつら不開を作り塀の狭間を
 切開き鐵炮を打出ると雨霰の如く寄手かき
 盡しとるあひもよらば明城との定めり
 心あり大に周章責口を引退きくるを信長
 御覽ト何者なれハ踏止りて我先陣無禮をそ
 ぞや其儀あり大軍一途よありしを城の石垣を

堀崩して微塵もあまをた下知しめんと木下つめて
やける様某うやむいへ爰ゆそ大将よ其時をとうそ
落をんあれ郎等あうらちを知義を思ひ屋形ふ
止ま一箭射く尋常は死したるめ此よといつるを
あひひ出よころりしめ此共を力責は攻めひあさ
味方と失ひ大将をも阿るぬりぬる為は名を揚
ささるるとまつそ最惜もわれまつは某ふ御任もある
登一士卒を傷まばして城を請取やべるとや
けるにあり然者藤吉郎をうらひひいとゆるはるふ
より木下を一人城際り馬を乗寄城中ふ
向ひ残り止るふ衆中へた一言やべさるめいと

呼りてれハ城中より何事とやと問藤吉郎高聲
ふ霜臺御父子とては石部へ御退散のはたしう
承知し偕ハ當城に残らむらふ誰人よてはせ
めあしや當方公方家の先陣を承りてく罷り
向ひゆハ雲霞のとき大軍よてゆそれをちるも恐れ
は防戦もするも忠とのひ勇とのひ感賞もあつた
さすなう霜臺御父子のさめを思ふれんは面
企りつるの外よ後くあるはうら累代主君
館敵の馬蹄よかけられんと口惜とて結構あれ
どの各の主君よ公方家の御陣へ向あし弓を彎
箭を放ちて後勘恐れ入ゆて退城あり

阿々ぞやおれは左様は腕ごてなり一むつと主君
 對して不忠とのふな天下は向う不義と申べ
 然るどめを辨へるは各々ともありしれ然
 佐く木家の侍中あり阿々ぞして此邊の溢れは
 どのれ寄合のくしげは振舞や當方の大軍
 一途は押寄をせんあ何り責落さてあさ
 武士を亂軍のうち大死させんとのかゆさ
 かくハヤ入る我能く別ありてせん死をんのち
 なむひ石部は落延あ主君の先途を見繼は
 末代までの忠義なれと申けるを城兵三雲新左衛門
 次けは三雲らとを聞元より承禎父子退去の

望々請々残りし所なりあれハ三雲の心
 觀音寺を佐く木代くの館あるを無下は開き去ん
 その口惜く江州侍は耻を知るはれあさぞわ
 沙汰をられんを憤りありひて手勢をりを引分
 あく止り四萬は阿々る大軍をりは數ともありは
 防を戦えんとあひひ定一勇士あはる木下は詞り
 棄かて爰て討死しを佐く木家の運を開く
 阿々も阿々は一旦の合戦を残り止は弓箭の冒
 とちう石部はは入道父子の爲は命を全く
 あなんは真實の忠義あめと思案を極め自
 槽ふのぼり木下は向ひこれハ佐く木六角の侍ふ

三雲新左衛門尉晴友とやりぬれぬ知食ごとく入道
 父子當城退去仕りぬと多年住あれしこの城を
 ひるあゝく棄ゆこと近比残念に存いあまり落止りい
 処へ御先手此衆理不盡に鐵炮せうちうけられぬ故
 力なく一箭仕りい仰の如く主として入道父子こそ
 避とうい當城よて何れと某あると心ぞむいとくを
 いり体のこととなし得やぐき速に城を退去仕るべし
 去るうら代々の住居よて見苦敷りれも彼是多い間
 扱れらを掃除て御渡し可やい志を御猶豫ある
 ぶと様ちの存する旨とや出しか藤吉郎尤れ
 御事之心静に退去あるべしと答へ信長の本陣よ

この由と言上は依り諸手下知し責口を緩けぬ
 三雲新左衛門尉手勢を引つれ城中を淨め入道の
 取あともし佐木木の重寶ととりぬるをさすのち
 木下み只今引拂ふよと告大手の門を開き新左衛門の
 搦手より五百餘人を召具し静くと石部とて馬を
 うとせける三雲り体いりよ由に敷見たりけり木下
 藤吉郎ハ新左衛門尉か使を待て後先手へや乗入
 りやと告けるふ是もよ謀よてや何らんむんと
 以前より進み得ず藤吉郎大に笑ひ御許等ハ
 不思議の人か退くべき時を進み進むべき時を
 退くべし何とのかと扱や今もちとも恐るること

たゞに猶豫をのちしきよむ我もつげや
人くとよむりなる秀吉真先に乗込
一千餘人隊伍正しく込入りしを以て諸勢一統
我めくと乗たりし木下城中を巡見し今も子細
なりしや御入城しと使を馳て告げしあり
信長居る入城在に諸將もく参上し勝軍を
賀し其のち軍議を定めらるる木下藤吉郎
るるははづ差當り眼前の敵なり守山日野御發向
然るべし但日野の蒲生右京大夫賢秀を當國無雙の
勇士とのひ忠義厚き弓取りあり
守山を觀音寺より武佐鏡を過り今道五里あり

及ひ日野八日市場野出を經り今道五里あり
蒲生八郡名を唱べ賢秀を武藏守秀郷
廿三代左兵衛大夫定秀入道快幹軒の長子小字ハ
藤太郎母ハ馬淵山城守の女今年賢秀三十五歳
父定秀入道五十餘歳ありし
願くは説客として能利害と義不義の理を述べて
降参るる味方ありて大幸ありし
軍を向攻さず向攻さず城を究竟の要害あり
勿く急ふ埒明しと申し共先軍兵を差向一責
せめて後計し由りて手分となりし日野ハ
柴田權六勝家佐内藏助成政蜂屋兵庫頭頼隆三を

大関三編卷之五

大將一萬餘騎守山ハ木下藤吉郎池田勝三郎
信輝兩人五五千餘騎と添らるゝ仰を受く
十三日巳刻觀音寺を發し守山日野の兩城ニ手
下押し寄る

木下藤吉郎守山の城へ寄る事

并堀尾茂助城中へ使節の事

柴田木下信長の仰ありて日野守山へ向ける藤吉郎
ハ池田と共に守山乃城近く押寄備を立城の容子と
伺ひらるゝ守山の城を佐々木の旗下種村大藏大輔
居處ありし上坂主馬助を加え一千餘騎を籠城
をり然るふ織田勢十日より當國へ押寄十二日此

朝まてに箕作和田山の兩城を落し昨日ハ觀音寺
の城も休え承禎父子石部へ落つひ跡へ信長
入替りしと死より此注進櫛の齒を引よれハ
城中以の外ハ騷亂し士卒力を落し轍魚の渴と
凌ぐ心もなれとも大將種村少も臆する色を見せ
今日ハ定め敵の寄人をもん防戦の用意をせし
く鐵炮をき間なく配らるゝ凡勇士の本意ハ小勢
大敵にあらざるを以て名譽と其のやゝも江南
みて大將の名を汚るゝ織田家の大軍を引受軍
と日頃の本望あり人界小生をうけり死を以
とのめとやある同トく死をば戰場に駈向ひ花じく

死志ありあそつてさよら終人くも某と共に此城を
枕ふ討死しあそんと定めく宿世よりの因縁に依
ある一勢乃多少と見るあそなき命を限り振舞
あそ死しその後乃名あそおれ臆病の神ふそ
これ未練乃働さとなりたそ生らりとも千年万年
を過つてはあそは多られ人よ後指をさされ何う
せんといふあそけあそ上坂も是も同心し共く士卒を
勵ましあそは實も軍勢の剛臆も大將の心よ
在りのあそはあそまで落支度の兵士忽し強勇れ
氣力をあそ一足も引な引くと勇め諫められ互の
持口を固めあそあそたのりけれ木下藤吉郎此躰を

見く池田よ向ひ當城を守る種村もさる勇士と思し
あそあそ大軍よて押寄しを見たりあそは恐怖の
色をあそあそ侮りく軽く鋪軍もは味方多く損
あそあそ敵の氣を屈めてのあそ攻付すと計を
あそれハ池田もこれよ同一備を固くして扣くあそり
木下も密り城の要害を窺あそ四方とも透間
あそあそ如何はあそと案し煩ひあそ池田
中ける様この躰乃小城りさあそ思慮を費しあそ
あそあそ遅くあそあそ日野の城落去せば我く云
甲斐あそといふあそ口惜かあそ只神速よ攻懸り
踏潰し半とあそあそ藤吉郎打りひ柴田

八月己三編卷之三

七

勇ありく智慮少あり蒲生と日と同日として語る
 つき人ふあはれ其の上ふ今日いふそやくも日野ふ
 著たるんを午未の刻もあがりぬらんそれより責
 かりて争てら日野を攻落し得んやあつのもあはれ
 賢秀尋常乃侍なす給ひ柴田と駈合て五日日ふ
 落さるべきさり此なるに日此城を乗取てのち日野又
 向ひ暖を入蒲生父子と味方あつんとありあはれ當城
 のうは強しとも大勢しそ入替く攻立ハ不日ふ攻落を
 つれども是計の小城一川は向く雑兵一人討せん
 ことも惜うらむ一依る心易く攻落らん方便をありあ
 はれ術もわめひ付られハ静ふ某がなきん様を見

のへか抑當城の兵士も種村の心を心とあはれ
 勇壯の氣を張死を以てあはれ城を守る志勿く
 なやましく奪ふらん但其勇氣強きを以て謀を
 行ふべき道を得たりまづ辨舌あるものを使として
 城中に遣し降参をせし免させんよそれ詞大ふ
 敵を侮り輕んし味方大勢をたのむ怠慢の体を
 示さば彼あはれに偽り降り味方の怠慢より
 乘し夜討朝がけなるとして一衝をせよとありあはれ
 其の折ふ臨んく施まらざる計策あり其れを今云
 り及ぶはとやけるふより勝三郎も覺束なるあはれ
 あらう兎も角も計らひるるべき由を答へれば

木下五郎もさち堀尾茂助吉晴と呼出し其方々々
 城中ふ行向ひ斯くいひく種村の顔色どよめく見
 定め歸れその答ふりによりてこの城忽攻取る
 かまもてくそく立廻れと教へさして城中遣
 けり堀尾も人品よろしく辨古衆も勝まるとはれぬ
 其の撰は當ぬり木下池田ハ堀尾を出し立てのち
 五千は軍兵を志どけなく爰彼ふ備へ散り更ふ
 用心の体を見むげ取もてぞ見むさけりけり茂助
 吉晴守山の大手ふいら是ハ寄手よりの使ふぬ
 大將もやぐさことのゆへ門を開き入られぬと高聲
 ふ呼する其乃時城の大將種村大藏大輔下知して

兵士一人を出し矢倉の挾間をひらきして何とぞと
 つふ茂助よはも不興氣もて某使節とてすのり
 来る、當城の爲になれりとありあくる来る大事の
 口状なり輕く人便よりあづきよ何ぞはこれハ
 城中に入大將は直に中へ使ハ某一人ありそれを
 ぞく恐怖て門内へ入られぬとて城將の臆病がこれ
 たり左程の心よて我等ふ十倍ほどの勇士五千餘人
 何とて對揚のあはるさそそとや弓を固甲を脱て
 降参り籠城の面々乃命を助うりまの外見てハ
 勇猛乃衆中ややありひ川もよたまでたき人これ
 氣色うると笑ひくるにより件の兵士矢倉乃

狭間を立ち上りて走り下り種村よりかくと告ぐ
種村大に憤り怒る使の云条やたらへ呼入子細を
聞下しと申けるを上坂主馬助のやくこの者ハ口利そ
利害を説く籠城の志を感とさんとのためあそん
既ふ死を極めたるゆれりゆるる事ありとも變
はくそやさゆれどもこれ又面會を法る多臆をふ
似たり此の詞ふ志あつて又計らふ旨もゆるべし
とく茂助を城中へ呼入り吉晴のともやりよめて
あり種村上坂は對面し申ける様信長當國より
討入り事を何と思ふや尋常とてゆれし
世の習ひ境を侵し國を切取んる為軍を起す

の北と大ふ同しに新公方家義昭君と申奉るハ
前將軍の弟君よあそゆ御兄將軍を弑し奉り
三好松永を追討し天下の亂逆を鎮め太平此
代とてふふふ御本意とてまゝ美濃國御動座
はゆし數ありぬ信長式と御頼ありつるふより信長
引矢取身の面目と一義とを及そゆ打立新公方家の
先陣を打ち上りかばさゆる日月のまご地より落
あそゆ君を弑し逆賊り與力合体をんと勿体と
ありハはれ算作和田山の兩城たゞ三時ふ埒明し
かよし観音寺の城よりて先年新公方家あつれあ
當り参らむしその耻かりるもの怖しき城を

さて、逃失かんかうれ、信長う弓箭前の威光ふ
あつて義兵と云名の強くして君ふ叛る君を弑し
罪のせれせんとせられり身をせむると知る御邊
ごも一手の大將なりたるとハ御邊の侍り御邊を弑
しむらんをさても能せしとハよものじあれ天道人理
をのつゝこれ理あれハむらみ処たれ久信長ふ相撲て逆臣
一味の汚名をハ取づきぞ道理を知と人との道理を
知ぬ禽獸ふ近御邊り主の佐々木さ道理下向ふ
かあともくまは城を棄て逃りしぞかそれ御邊
らかこの城は死を以て籠城をくものありしは
主君心をくもを以て能郎等とハヤとせられ主の心も

知を犬死し何の益う何るされハ日野の蒲生をくめ
枝城乃面くいられも主の心を知るとり此ハ城を開く
石部へ行主と一川ふなるそ御邊等う振舞ハ主の
罪を重ぬふそをれいさうを主の為とせよあつて
去とも罪なき士卒等と無名の軍は討せんことを
かあつて大軍城下ふつゝをさうら責口をゆめめ
いまの戦を挑びいまや開城の沙汰あると待川也とも
更ふその音信あをを以てまげてかゝる中通るも
と一思慮浅く是非とも戦をこのつゝああらハ為方逆
四方より仕寄を付くた一舉ハ攻崩しなると最も
心易うと述りしか種村心中ハ狐疑を生

いさゝら不快の色をあらはしければ上坂側より寄手
懇志の使節先にかゝりけし願ふは暫時休息あり
うー一統評定の後心を決し返答せよとやせしむる
茂助それとぞれと猶豫せよとややく評議ありて
然るに御邊等乃た後一川にて當城中千餘人の
命の存亡ふかるとぞせし生る忠を君に盡し榮を
永く子孫に傳えんとの大死して君に不義をかき
無間と墮落して修羅の奴とたゞんとのたゞ一言
の上あほりよく分別あれりと傍若無人と言
出しかゝ種村いやく怒り頻り刀の欄を握けるを
上坂急度目合してこれと止免堀尾を一聞伴ひ

様く郷養應し置種村上坂打寄評定しける使者の
口状あやうりに悪さけくさりあから満水ハ欠る世乃習
とく寄手の心大に怠慢をあらし勝を重ねて意の
満し故あり斯くなると敵味方小眼をさるるは
働をなすはなやとあり如何とぞやけ種村手を
打く大いのて立られ誠は良策あり秘をせり
さゝ堀尾は返答をせしとて茂助をよぬき出し仰
こさこれ趣をことばに以て辱けし闇夜小燈火を得し
心地しそいそや降参仕るつきて直に御陣へ参上
仕るくゆとも籠城の兵士千餘人へ御諚の趣を
言し明日をやくは當城を御らるべし

よ後々々此旨御執成被下るると丁寧とて堀尾を
送りかへりて

流布本此段の議論穩うあつてよりて江州人の口碑よ
よりて改作は

重修真書太閤記三編卷之五終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

重修真書太閤記三編卷之六

秀吉謀り守山の城を取事

并池田信輝種村大藏と撃事

堀尾茂助吉晴守山城に使者智辯と振ひ種村より
怒氣を起さむか川味方勝軍よ心奢りて体とあり
めりけし果て上坂その圖にのり種村と
勧めて明日降参よとせよ茂返答けるより吉晴
早くそとを歸りその由を木下よりをか木下手と
拍く大よ悦び池田よ向くゆけるハ謀りて成就をり
今夜かゝる夜討あるべし各々用意いさされゆ

大陣言三終卷之六
但味方の陣中表より急ぎて体を見を随分油断を
支度ありて下知して今夜のうちにこの城を乗取
べき形りと下知してまづ木下の陣を一町ごりも
操さげく城將明日降参する約束あり最早用心
及ぶほど馬の鞍を脱ぎ甲冑を脱ぎ酒宴を
催しやすとふらちとけく見をさつりける城中
上坂種村の体を見をまゝ相談しける寄手は
葷味方を侮むと法も過つり降参せんと返答は
とつらふも真實とありあつと志しれつりいざ夜討と
美濃尾張のめれどもの肝を取りぐべ但只今忍
びのめれ注進の様とて夜半比まで酒宴をば

それより打つてらん寅卯の刻を熟酔して
正体あるを慮さつり拵の比を見濟して不意にお
寄あはさば驚き駭かすその者どもを撰
打ち討て棄馬物具よりして太刀刀鏢長刀あり
はふふ捕まへる形り面く心ふ心をゆるさばよく働
べきありと下知かりけるありその手乃の共勇
立いすご手も取ざる敵の具足をこや我物顔
あつてをわつてされば宵より兵糧支度草鞋の
緒を先得道具を引さげ嗚呼といひ追と駈
出んと待うけつり寄手の陣より藤吉郎下知して
陣より焚火をあたつても白晝の如く明るき中

の酒宴あれば遠目にも賑々々歌ふ聲舞音さあ
から戰場とそおれそれぞ夜半そぞろうよこれバ
今まま空ふ映たる火の光りも次第に消かてに
あり兵士等も酔倒せしと見えさびげよまがり
門くろ番士さへ何地ゆきんかげもふー定めて
夜中まその酒ふ酔疲れ前後りらげ打あする
なるといふ是れ藤吉郎の計策よていやく一千
餘人をあて手まらけ本陣より少ー引さげて伏置
敵よ勢來らばその後へ廻り左右より鉄炮を打ちけ
押切く攻かくるゝと約束しその外小蜂須賀小六
同又十郎加治田隼人稲田大炊助等々勢八百餘人

堀尾茂助を案内者として城小向ふてかき置敵
打て出はそれと知らぬよて直小城中へ入る
と定め扱す木下池田の二人を逞兵を引率し
陣の後よ扣陣の内りハ枯柴焼草を積置相圖
次第小火をかけよと定め置志がかり返りて待
かけありまぞに扱る夜も寅の刺曉が近くたふ
すに守山北城中あてハはハや能時刻ぞと種村
大藏大輔三百餘騎上坂主馬助三百餘騎二手入り
りかみさく左右より一時小攻入べと定めて城中ハ
兵士四百餘人をのよー置静くと打く出敵陣近く
ありし時種村上坂諸卒あむらひ敵陣小討入とす

あなうち敵を討んとありふらば一身の手柄を争ふ
とありれ只よく走廻りて熟酔を敵どもに膽をひや
きをおどろけとあそて騒ぐを追ちてはあそ肝要なれ
逃るがとりのしとて長追するな分捕せんを味方を
そなるもあこの約束をそむくともなく合辞を忘るくな
とぞ下知しり扱總勢六百餘騎寄手を欺きあつて
たりと心お悦びおそらふ敵陣へ押寄物見を走ら
伺えは酒宴の席をその儘お燈火かきりお酔伏たる
体とくと見をば陣門の番乃者もよく寐入らる
由を告たりしかば種村上坂笑壺ふ入る士卒を勵
いさゝ進何の會釋もあく寄手の陣中へ左右より

討入るもよ人氣あくるに閑ありら能も打とけ
寐するりのかゝりや驚りて眠をさばて呉んぬものと
頻りにそやうて鉄炮を打つけ閑を作せと下知せ
かば二手の諸卒一齊り閑を嚏と作りかけ鉄炮
はきさよあくるをなけけふより陣中あそか騒ぎ
出さそて夜討の入るなるんよく心して防げやと
呼もりくを廻る夜討のゆれども得たりかじと
走り廻りいよく進んぐ本陣へ切入んとそるりしり
鉄炮の音ひびくやのあや陣中一時は猛火燃出
四方八面とくく火とをりく焼立たり寄手あひも
よゝぬとをれは是をいりあとなめらふ処へ木下

池田の手乃兵三千餘人煙の下より関をあげて鉄炮と
つるべをなす潮の如く如く馳出たり種村上坂肝を消し
さてハ謀のありけるを不知しとうかくと深入せしことこそ
くやしけれ早操返をり共とあそそふこゑに先陣門
の外へ引てのち又ハ我戰をめと采幣を振る靡あ
ども崩れ立たる勢あれハ耳も更ふ聞入は我先と
逃りたるあどふ隊伍も散乱一二の備を
やまらざる處へ木下池田乃伏勢たりける一千餘人
逃行さるるを取らりしうかやと攻りたるにあり
種村上坂も途方をとりあひ敵を欺りんとす却て
欺りぬしものをつらさる一方を討破りて城中へ

ちと歸りしつらび謀を廻らざるやとおのひ六百餘人
と真丸ふ備く駈倒さるやとおのひもこの者どもを
陣中ハ火焰ノ手足を損ド又ハ鐵炮を受る者を
助け合く進退自由あはれどかくはるあどふ織田
家の大軍追りしを加そり稻麻竹葦の如く取
圍たり種村上坂いし驚きあきし如何せん
思案するを見く聲く汝等約束を引違夜討
せこの腹黒さよされハ自然天罰をかむり自滅
勢んとすふ有様とすやあれし付ても不義ハ
振舞とけはまどかきけりと呼そりく撃も烈しく
切も強く馳廻り川不義の軍して勝んとあひ

大関三編卷之六

あろうと云ふをやく降参して妻や子を見んとハおのゝ
親をたゞきり母ハ最愛のこゝろと成りあえられ六百
餘人のりれども甲と脱る降参し命助り父母妻子
と見ざるをたゞきりふかしくおのゝ立られハ我戦ふんと
いふもれあく落支度のこゝろをけりを見て種村大藏
いふハ是迄ぞいざや潔よく討死しく勇士の名を
残さざるやとわをもひ切て大太刀を打り豎横十
文字に切廻し近付りのども或ハうこれ或ハ手
負われを打止んと双向あめれなく此口開けく
あそや破られぬをく見えけるふより大藏い
勝ふのぞ進み戦ひかけ抜けるを池田信輝と云ふ

見付馬を飛を鐘を取の追かけ來り大音あげ
いつまう命生んとてきくも我等も後を見
こる抜や詞も似ぬ臆病り此やとのこゝれバ
種村急度りかへり大乃眼と活と開き何条逃るを
いふもああるべきいざ手並の程を見まへる抜と
血ふ染るふ大太刀を振あげ只一討と飛うは
信輝よこゝも恐るは渡り合火花をちらし打合
けり池田を聞る鎗の達人なり種村り太刀を
拂ひ落し付入突んとする処を大藏手ぞやく鐘乃
塩首を片手よ引ぬらぐたりよらんを揉合めり
池田を鐘とあげ捨馬を駈よむと組双方牛角

の勇士なり 暫く勝負も見えざらん 遂に勝三郎の
郎等片桐半左衛門といふ若者この体とては寄り寄
太力を抜く種村に乗る馬の太腹をさし貫きやバ
馬も屏風と倒れ如く大藏馬上ふたまり得ず池田
と組あから大地は瞳と落けるは釣れく信輝業
落かきましかば終る種村と組敷らり種村元より
大刀を業の勇士なれども数刻の軍ふ身心勝
れを返返すべき力あくと免くと池田は討ちつり
池田も種村が首を取太刀の切先は貫きさう上り
あられもや守山の城主なる種村大藏をかくの如く
討捕つりと呼ぶしかば其隊の兵士恐怖は手を

摺腰を屈め降を請上坂一人如何ありて遁きおん
行衛もしらば逃失らり扱す蜂須賀堀尾が輩は城兵
打く出跡へははり不意に城下へ押寄無二無三不
攻立けばバもつうふ残り軍兵どもあひもよろぬ
とこのひ以の外は周章し防戦の術をうしなひあき
てたる処へ事あるは蜂須賀堀尾は八百餘人
面もや切かり即時に城を乗取く役所へと
持かこめ志ざり息継居りけるは夜討の兵士も
かへり来らば夜の不のくと明ゆくは後木下池田は
兩大将守山さして押来れば蜂須賀堀尾これをもつ
入勝軍を賀し志をし休息ありて本陣へ守山落城の

大関三編卷之六

七

様子ようすを注進ちゆうしん有りあり々々れれバ信長のぶなが悦喜えつぎかきりかきり々々木下きのした
池田いけだの智略ちりやく乃なほ働はたらと感かんををらられれ々々

柴田勝家日野の城を攻る事

并蒲生賢秀防戦弓勢の事

柴田権六勝家蜂屋兵庫頭頼隆佐々内藏助成政
三人を大將となし一萬餘騎を蒲生下野入道快幹父
子の籠りたる日野の城へさしむけけるふさしも名高
き蒲生父子なるれバちとささるがは鐵炮矢石を飛
く防戦は城名ふあふ名城あり寄手名聞る
勇士なり一萬餘騎を三手ふ引分入替く攻けるをよ
城よりさあつ弓鐵炮ふあさ矢あけまはる寄手は

手負多くしてたを城際までも近付得ば柴田勝家
大ふ怒りこれらふ小城一川を三人しく攻落かぬと
いふとある勢を一萬餘騎あり手の上ふ載て持ても
投りべし命あまび攻よかれよと下知をふ鐵炮
きびく打放し狭間の板を開きさそその間ふ手痛
く立切さすめくと攻りけり城ふ籠る所をつりふ
八百餘人といふもいづれも一騎當千の勇士ありて
大木大石をなげかき受を先途と防ぎけり寄手ハ
柴田よりいさめられ透間あせず鐵炮手志げく打
かけしかバ城方の防戦はさしづる難義小及ふ如くふ
見へしつバ柴田これを見く此圖をそつづさば乗入ると

真先り進んで攻めたるを城の大將右兵衛大夫賢秀
 力世ふ勝を武藝も等倫小秀なりといふ中こふ
 引る養由が秘奥を傳へ爾も無雙の強弓あて名譽を
 顯すたる精兵なりけるがごとく一軍して寄手の肝を
 ひしぎ味方の勢を添べしとて櫓の上り立あしこれ
 雁股鳥狩矢の差別あく小山の如く積置て大音あげ
 ひり承平小相馬乃小次郎將門を一矢小射落し名を
 末代までかやうを田原藤太秀郷の後胤として
 數代この蒲生の郡と知行を右兵衛大夫賢秀なり
 習練の功を先祖より劣るとも弓の力を更ふ負い
 魂乃自慢の鉄あり受く見給へやといふやうに五人張

十五束満月の如く引絞る影いふ河と切ら放きば
 あやゆきず真先に進く馬武者の胸板を鎧通し
 射透しなり是を軍の初とて差詰引詰矢繼ぐや
 射ありしかば首の骨を大雁股射切れしれは
 鳥狩根伐内甲へ篋深し射込れしれも有透聞ひなり
 寄たる敵あふ人馬のりちハ何れども仇矢を更り
 ちりりけり暫時り手負死人影敷くさしゆも小猛
 柴田が手の者もこの弓勢を辟易し頭を縮め身を屈め
 楯の蔭へと潜り隠れ勝家も面を向べき方なく聞ふ
 増る精兵かたしからる感トかひあきれためらふ
 日る西山よりかたしからる士卒を痛く疲せしかハ攻口を

退いて陣をとり明日能く思慮をめぐらして蒲生く
大矢を防ぐ用意して責べると評定しその夜も用心
嚴敷守り明一翌日早天よと柴田佐々蜂屋の三大將
とのくや合楯の板を丈夫に補理ひ數十枚真先よ
突あへその跡に鉄炮の兵士五百餘人を撰り伏置
蒲生う弓を射んと櫓の戸を開きたらん処をぬらあて
川のべを遠く切くあてておれに續いて大軍一同小
攻寄たらバ忽に城を落しけり形りこの手筈を
違ふ魚う渡と約束し堀の際まで押寄しれども
城中はあつちよりかゝり音めをば斯くはしてト
鐵炮を打ちけく見よとて五百餘挺一同よをたし

かけく遠峰に影くをうまれ一向人ある
体も見よと初終籠城叶はるるを知ら
夜中より退去をせんさの怖るることか堀
取付乗入よと下知しけはるる堀の中もいざ
飛入築地を傳ひ石垣をのりからして堀際より
いり既よ上らんとする処を見よはるる俄に所々の
櫓より大木大石を雨の如く投いごそのひあよ
蒲生賢秀大手の櫓よのり今日ハきのふより引替
三人五人よても動かぬ大石をかめくと引提瓢
なるとあらふと力よ任をく投出しけはるる
堀際より付し兵士いづれも此石よ打ちがれ柴碁

大月三編卷之六

倒と見るごとく即時に死人山をば手負多敷を
 知られど寄手案小相違一かくの如く攻らん
 多く味方を損むるをよみて我ら詮有さば如何
 攻落一城より番兵をよその身々観音寺山へ
 出仕一軍の次第を言上一さてめちよ日野の容子を
 伺ふり城はよく味方死亡日多くいよご落去れ
 るどと知かごとく仰られけるよあり木下言上
 ける様蒲生父子必死となりて防戦いよごあつた
 勿々たやそく落去仕る海に神速も味方も歸伏
 あり一めららるるよとけよ信長よよめ

大軍を怖むに防戦一味方難義よ及ぶのをいふで
 神速も歸伏あさしむべきぞ汝ら一糸不審くや
 宣ひけむ木下やよく勇士の習ひ籠城して大軍
 を引受たらんよ何とく彼方より降とは請いよ
 此方より攻めよこそ彼方よても防ごるれ蒲生父子
 を思慮も密らふ心中も猛きめれふあり籠城して
 始終叶えらるることぞ知べ一されども勇士の義理と
 意地とをわらふ軍とありていよ能々義理を
 盡して諭されんり何とて無益よ討死をば望むべき
 必定味方よ参るべきめれあり幸の事もよそいへ神戸
 の藏人殿も右兵衛大夫賢秀の妹を迎えらるるあり

快幹入道と親しき婿舅の間柄ありこれハ具盛殿の
使ヲ君の御使を添られ細やうふ談ひゆる争てり
背き申さるべきと勧めけり信長實りと思召
神戸藏人を呼れり此度の催促より陣中
参向何りつれど神戸信長の御前ふ出れバいふ藏人
御邊の室家ハ蒲生の息女とかやさらバ親しき中ら
なりいそぎ日野の城中ふ使者を立られ彼父子を
公方此御味方とありてさうば技群の忠功あるべ
いと仰られ々々ふ具盛畏くやけハ小舅も右兵衛矣
かこの如く勇氣なやぬりのよてん殊ふ去年より
以来不快の中よて音信不通よりく彼父子意地

強きものれよ縁者あとの中条ふ付ていえまを参
侍あゆむなど申さば却て然るべうと存具盛
更ふ死を怖みそ中らにゆるゆる日野まで往向ひ
いと浅厭ふ由りそ何ら只首尾の整不整と
ありふ斗りゆると中らば信長實りと思召ける
よやいささ猶預の氣色見へる務まありり
木下よこへ出く一應御尤の仰ふへとも御縁者の
因る私事あり今日の事ハ公方の仰をあり此むと
御不快よりはゆとやもやう私宿意あり
私事を打てて只逆賊の三好と親む佐々木
六角又懇切を盡はるるこの天道よそむる人心

大岡記三編卷之六

十一

み違ひの由をゆきさるべき事ゆゑその外のとほき
私の事よゆへ公方家御上洛の後何時も
御互ふ仰らるべきにゆゑ我君よりも別は御使を
添られ天下のを免る大忠を致さるべき由を仰い
けしきくゆゑにゆゑ事埒明やべしとゆゑに
間具盛忽よありひ得し事ありしやいとも木下の
中さる旨尤至極をり別使を御そく被下ゆそんと
なす日野のゆゑり向ひ公方家の御為忠を致しゆと
中勸むべくひ蒲生さるめて異儀とゆゑに及ぶゆ
ゆとゆけゆ信長大に悦をりゆ誰とゆ遣はる
べきゆ宣ふ時前田孫四郎利家さる出某日野へ

往向ひ神戸殿と共に蒲生を説伏しと望
せられハ信長聞し召ゆとよ今度の使を勇猛
を頼まゆゆに智弁第一乃義をて蒲生父子の
心と和らげ公方の御役ふ立しむべき大切の使
節ありて尋常のとありゆ其方誠あかれ
父子を説ぶた智慮ありやゆると宣ふ木下心中
みハ此使者前田なるゆとありゆとゆとゆ
英氣をそげゆゆんかゆめ何さゆ殿の御説の如
く蒲生を名ふ負勇士あり智者あり御邊の
詞ふ難を打ゆたゆ御身一人の耻辱なるゆ
道理を以て説んとゆゆあゆゆと尋ぬれ

木下三編末

前田答く中様さめい弁舌を振ふく勸むふ
及ぶ以多言る災の根本なる某御使としく
罷向ひ君命をそぐくめば武威をおとさる天道を
主として中諭しゆらんのをこれを受はる蒲生もよ
用る所あり愚人として歸伏仕ゆとも何の益あり
ればよといと申けるを信長聞食それよて如何
何となく危ぶみひくる木下側よりその心
あつらん一定蒲生父子を説得なりゆべし此使者
前田あつてハ首尾とくのあべくはよむはる
他人乃及ぶ所なり何となくと勧めかバ信長も
これと同心ありと即前田を神戸と共小日野の

城へ差向ふ木下前田を呼近付密旨をささやき
示しけるゆあり前田も神戸も供人を減トもあふ
侍五六人を従へりつと甲冑を脱小袖より上下
と着しつと動ぶる色もあつ最静やうよめそ
なして出立けり
流布本に前田ハ今年三拾一歳壯年よりそ人品
骨が勝れ勇士あれハ諸人その行粧の優美
あることを感賞はるりと見ゆ

重修真書太閤記三編卷之六終

